原田さとみの エシカルでいきましょ Vol.12

※エシカル＝「思いやり」

ラオスのお母さんを支える
家族力・地域力・近隣力

JICA 中部のサポーターとして途上国へ訪れるようになり、大事なことに気づかされています。今回はラオスの母子医療の現場で活躍する JICA 青年海外協力隊員を訪問した時のお話です。

ラオスは医療の遅れから乳幼児死亡率が高い国と言われます。そこで日本から隊員がラオスの病院に派遣され、地元の医師や看護師とともに医療現場の改善向上を目指しています。

ラオスの産院で笑顔いっぱいの看護師や妊婦に囲まれて

衛生的とは言えない分娩室、乏しい医療機器…。農村部のラオスの女性は、そんな中で出産をします。しかも母子は産んだその日に退院し、家で家族が母子のお世話をするそうです。驚きましたが、母子にとっては自然な環境なのかもしれません。家族の愛情に包まれて過ごすのは、安心で幸せなこと。母子も家族も一緒に、人間本来の育児本能がはぐくまれていることに人間の生命力を感じました。ですが、急な体調悪化や乳児の発育不良など問題が起こった際に、専門的なケアが届かないのも現状です。そのため、隊員は家まで行って母子の様子を診ています。

町の総合病院では、産後数日は入院するようですが、入院中、母体のお世話は家族が泊まり込みで行います。病院の中庭に火を焚いて食事の準備も家族がします。まるでキャンプ地のようです。家族のいないお母さんはどうしているの？と聞いたら、近所や親戚の誰かが世話をしにくるので、一人ぼっちのお母さんはいないそうなのです。近隣力、地域力、もしかしたら国民全体が家族のような思いやりで支え合っているのかなと想像すると、ラオスの人々をうらやましく感じました。医療機器が乏しくとも病院の環境が悪くとも、ラオスのお母さんたちは家族・近所の“人の愛情や絆”という最高のケアに包まれて、安定した心で幸せな子育てをしています。隊員も「ラオスのお母さんはたくましい。この国では育児ノイローゼなんて聞きません」と言っていました。

そしてラオスの人に言われます。「日本には自殺する人がたくさんいるのでしょ、ここには自殺する人なんていませんよ」

…考えさせられる言葉です。ラオスの乳幼児死亡数を心配する日本では、その数を超える人々が自らの命を絶っています。こちらの方がはるかに根深い社会問題です。医療が発達しているのに救えない命があるなんて。途上国は、私に日本を見つめなおす機会を与えてくれています。人間一人ひとりに授けられている尊い能力を信じて、それを失わないように、先進国の私たちはもっと謙虚になれたらよいなと思います。

お知らせ ★ラオス視察の報告会「日本の技術で国際協力～プロがプロとして途上国にできること！」が3月23日(金)18:30から、中区栄3のナディアパーク4階の国際デザインセンター「Loop」で開かれます。参加費無料。メール(tomida@mijp.jp)で申し込みを。

プロフィル

はらださとみ
(タレント／エシカル・コーディネーター)
フェアトレード＆エシカル商品の輸入販売「エシカル・ペネロープ」代表。国際協力機構ＪICA中部なごや地球ひろばオフィシャル・サポーター、親子向けの絵本読み聞かせ「ルププ」主宰など幅広く活躍中！㈶地球環境財団エシカルJAPAN中部地区代表。エシカル・ファッション＆フェアトレードのセレクトショップ「エシカル・ペネロープ」をテレビ塔1階に続きナディアパーク4階にもオープン。
http://satomiharada.com